

(教育委員会用)

平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名

仙台市教育委員会

I 概要

1 事業の概要

特別支援学級を設置している本市立学校から10校(小学校9校, 中学校1校)を実施校に認定し, 障害者アスリート等との交流及び共同学習を各校とも1~2団体と実施した。
(スポーツ)

実施した学校は9校, 競技種目等は以下の通りである。 ※()は活動拠点

- ・車いすバスケットボール(仙台市)
- ・電動車いすサッカー(仙台市)
- ・シッティングバレーボール(東京都)
- ・ブラインドサッカー(仙台市)
- ・スポーツ義足のマラソンランナー(大阪府)
- ・義肢装具士(仙台市)

各校とも, 事前学習で障害者や交流予定の競技種目について学習した上で, 交流及び共同学習を実施した。主な内容は①競技についての説明②デモンストレーション③選手からの講話④競技体験⑤感想発表とし, 詳細は児童生徒の実態に応じて工夫して行った。

(文化・芸術)

実施した学校は2校, いずれも芸術分野。 ※()は活動拠点

- ・ファミリーアンサンブル(仙台市)…ダウン症の音楽家とご家族
- ・金管五重奏楽団(仙台市)…視覚障害のある音楽家の方々

両校とも, 事前学習で障害者について学習した上で, 交流及び共同学習を実施した。主な内容は, ①演奏②音楽家からの講話③感想発表とし, 詳細は児童生徒の実態に応じて工夫して行った。

2 事業の成果

交流実施に当たっては, 特に以下のような取組が効果的であったと考える。

(スポーツ, 文化・芸術共通)

○年間計画に活動を位置付ける

総合的な学習の時間の年間計画に位置付けて実施することで, 児童生徒が本事業で学んだことや感じたことをそれまでの総合的な学習の時間の学習と関連づけて考えることができていた。

例えば, 小学校6年生で「仙台自分づくり教育(仙台版キャリア教育)」に位置付けた学校では, 様々な分野で活躍している方と交流する機会を年間13回設けており, その1回に本事業でのアスリート, 義肢装具士との交流を位置付けた。アスリートとしての競技にかける思いや義肢装具士という仕事に焦点を当てたことで, 児童にとっ

ては、障害者についての学習というよりも「生き方」についての学びとなり、共に生きるということを考える機会となった。年度末に、学習のまとめとしてとったアンケートでは、いずれの学級でも、本事業での交流が「心に残った交流」のトップ3にあがっていた。この学校では、その後も交流相手と電子メールでの交流が続いており互いの頑張りを報告し合っている。

○全校で取り組む

全校児童生徒で体験を共有したことで、児童生徒同士が体験を語り合える場が広がった。また、全校で取り組んだことは、全教職員の障害理解につながり、貴重な学びの機会となった。この経験は、今後の障害者理解促進に係る学習の実施において、有効であると考えられる。

例えば、車いすバスケットボールチームと全校生徒が交流した中学校では、学年ごとに目的を決め、それに合わせた参加の仕方を工夫した。3年生は「生き方」から学ぶことを、2年生は車いすバスケットボールを体験することを、1年生は車いすの操作を体験することを目的とした。2時間の交流の間に、全員で話を聞く時間、学年ごとに交流する時間を設け、生徒一人一人がアスリートの思いに触れ、関わりをもてるように工夫した。また、日頃から居住地校交流を行っている特別支援学校の生徒も交えて活動できるようにした。全員で体験を共有したことで、話題とする場面が増え、それぞれに自分の感じたことを語り合う機会もでき、より深く学ぶことにつながった。担当した教員は、「教職員の中でも、障害者と近しく一緒に活動したことがある者は決して多くはない。障害者の理解を指導する者にとって、このような機会はたいへん重要である」とも話していた。

○アスリート、文化・芸術を組み合わせる

全校で「心のバリアフリー」の学習に取り組んでいる小学校では、本事業を年間計画の一部に盛り込み、シッティングバレーボール団体との交流を上学年で、ダウン症の音楽家との交流を全校児童で実施した。本事業以外で行った学習と併せ、障害の種類は複数あること、障害者は様々な分野で活躍していることを学ぶことができた。パラリンピックに直接関わる監督の方々を迎えての交流は、競技の楽しさを知るとともに、パラリンピックをより身近に感じさせることにもつながった。音楽家との交流は、その後ダウン症のお子さんがある保護者をゲストティーチャーとして迎えて障害者理解の授業を実施することに発展した。この学校では、本事業以外で行った学習も含め、廊下掲示やお便りで広く周知し、保護者への障害者理解促進にも取り組んだ。

○事前学習、事後学習を実施する

全ての学校において、事前学習、事後学習を実施した。単元構成を考える段階から交流相手と相談を重ねた学校においては、学習の充実と教職員の障害理解という点で、大変有効であったとの声が聞かれた。交流の目的を達成するためにどのように単元を組めばよいか、当日、どのような体験が有効かなど、双方で考えを出し合ったことで、効果的な交流を行うことができ、中には、交流団体から事前学習用のDVDを提供して

もらえたり、前日に交流会場で打合せを行えたりした学校もあった。また、国際パラリンピック委員会公認教材である「I'm possible」を活用した学校も複数校あった。

事前学習、事後学習でそれぞれアンケートを実施したことは、児童生徒の「思い」の変化を知ることに関わった。交流実施前、多くの児童生徒は、障害のある方は支援される人、自分たちは支援する人という、意識を持っていたことが、事前学習や事前アンケート結果からうかがえる。しかし、交流活動を通して、障害のある方と直接かわり、これまでの生き方や、人生観などを聞くことを通して、障害の有無は関係なく、アスリートや芸術家へのあこがれや尊敬の念が生まれていた。交流での児童生徒の感嘆の声や別れ難く何度も握手を求める姿、事後指導での発言や事後アンケートの結果にもこれらの思いが現れていた。教育委員会で、児童生徒の障害理解に係る思いの変化について5項目を設定し5段階で評価したところ、平均4.0と(+)面で高い結果となった。

本事業での1回の交流にとどまらず、交流をきっかけに、その後も関わりを続けている学校や、児童生徒の「もっと知りたい」という声に応じて関連図書等をそろえるなど障害理解の学習環境を整えた学校や、チームに贈ろうと応援用の横断幕を作成している学校もある。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

(スポーツ)

- アスリートやスタッフの多くは、職に就きながらその傍らで競技に取り組んでいた。そのため、平日の日中に交流活動を実施するには仕事を休んで来てもらうことになる。団体競技では、メンバーがそろって仕事を休める日がなかなか合わず、交流日程を組めなかったりした。次年度は、日程調整期間を確保できるよう、交流期間を3か月長く設定することにした。
- 仙台にある交流団体は種目に限りがあり、学校のニーズに応じて団体を呼ぶには、県外から協力をもらう必要があった。団体競技では、複数名で来校してもらうことになるため、次年度予算は、講師謝礼と旅費を増額して申請することにした。
- 旅費について、タクシーが認められるとよい。仙台市のように、まだ十分にバリアフリー化が進んでいない都市にあっては、県外から来た方に、公共交通機関で学校まで来てくださいと言うには、難しさがある。障害がある方ということを踏まえて、認めてもらいたい。

(文化・芸術)

- 今年度は音楽家の方との交流で演奏会形式だったため、次年度は触れ合いながらの交流もできるよう、書道や絵画などに取り組んでいる芸術家の方も探して、創作活動を通しての交流を実施できるようにしていく。